様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23　年　5　月 17　日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20592622
研究課題名（和文）　保健室における養護教諭の行う養護診断の開発と評価

研究課題名(英文）　Development and evaluation of Yogo diagnosis by Yogo teacher at Health Room

研究代表者
岡田　加奈子（OKADA　KANAKO）
千葉大学　教育学部・教授
研究者番号：１０２２４００７

研究成果の概要（和文）：
本研究の最終的な目的は、養護教諭の行う養護診断の確立である。本研究は、萌芽期の養護診断をさらに進めるために、１）すでに開発されている養護診断「心理的要因の存在の可能性のある状態」については、（１）学校種（小中高等学校）別の診断指標の開発、（２）教諭との診断指標の差を明らかにし､本研究における最終版を開発した｡グループインタビューにより、養護診断「心理的要因の存在の可能性のある状態」については、11 の視点を明らかにした。本結果は、質問紙とインタビューで、概ね同意された。教諭の視点と比較した結果、養護教諭の視点は、教諭の視点と共通の視点と、異なる視点があった。さらに、２.「痛み（疼痛）の可能性のある状態」の養護診断を開発し、３．養護診断枠組みの検討を行った。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study is to develop the Yogo diagnosis. We found out he Yogo diagnosis of “probability situation of the existence of children’s mental problem” and estimate the validity of it. The research of development stage was conducted on Yogo teachers and teachers by group interviews , This study makes it clear that the clue of the Yogo diagnosis of “Probability situation of the existence of children’s mental problems” has 11 viewpoints. From this research, regular teachers and Yogo teachers have common viewpoints as well as different viewpoints reflecting their type of work. Yogo teachers and teachers verified by questionnaires and group interviews that the result of this study was relevant. We also found out the Yogo diagnosis of “probability situation of the existence of children’s pain” . And estimate the structure of Yogo diagnosis.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：学校看護
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：保健室、養護教諭、養護診断、初期対応、看護学

１．研究開始当初の背景

養護診断は、遠藤伸子らのグループと岡田加奈子らのグループらにより、まだ開発が始まったばかりである。養護診断「心理的要因の存在の可能性のある状態」といくつかの養護診断名が開発されたものの、診断指標は、十分な検討がされていえるとはいえない。

２．研究の目的

本研究の最終的な目的は、養護教諭の行う養護診断の確立である。本研究は、萌芽期の養護診断をさらに進めるために、１）すでに開発されている養護診断「心理的要因の存在の可能性のある状態」については、（１）学校種（小中高等学校）別の診断指標の開発、（２）教諭との診断指標の差を明らかにし、本研究における最終版の開発を行うことを目的とした。さらに、２）「痛み（疼痛）の可能性のある状態」の養護診断を明らかにすることと３）養護診断枠組みの検討を行うことも目的とした。

養護診断「心理的要因の存在の可能性のある状態」学校種別診断指標の開発、並びに教諭との差

３．研究の方法

（１）対象並びに調査方法

同意書の署名により、調査協力の了承が得られた公立小、中、高等学校に勤務する養護教諭 38 名を対象とした。養護教諭の経験年数は９ヶ月～35 年９ヶ月であり、平均経験年数は 19 年８ヶ月であった。

対象を各学校種、２グループずつ（１グループ５～７名）に分け、計 38 名を対象にフォーカス･グループ・インタビューを行った。

比較対象として教諭に対して、同様の調査を実施した。

調査は、方法の統一を図るために、あらかじめ質問内容や方法などを決め、それに基づき行った。インタビューでは 「心の問題等が背景にあると考え、養護教諭による対応が必要であると判断するときに、子どものどのような情報に着眼しているか」、具体的な症状、状態、状況、行動、情報等について自由に発言してもらうという方法を用いた。また、インタビュー内容については、 調査対象者に事前に許可を得た上で、録音し逐語録として文書にした。さらに、共通認識されている内容であるかの確認のために、調査時にインタビュー対象者らの反応についても記録した。１グループあたりのインタビュー時間は 50～75 分であった。

倫理的配慮については、研究対象者に対して、目的の説明、録音の了承、匿名性を守るため個人名を特定しないようにして取り扱うこと等についてロ頭で説明し、文書で承諾を得た。

（２）分析方法

『視点』と【着眼点】の抽出について、次の２つの段階をおって分析を行った。以下、子どもの背景に心の問題等が存在する可能性を判断するときの視点を『　』、視点の小分類を〔　〕、視点及び小分類の定義を［　］、着眼している具体的な症状・状態・状況・行動・情報を＜　＞、着眼点を【　】、逐語の要約を“　”、 分析の手がかりとなる言葉を‘　’で示した。

① 分析ステップ１:『視点』の抽出

逐語録の中で、養護教諭が子どもの背景に心の問題等が存在する可能性を判断するときの「判断の基準」が示されている内容にラインを引き、それらを含む文脈を要約し、“逐語の要約”とした。そして同様の発言やその発言に対する同意についてはその数を集計した。養護教諭が個人的に持つ独自の感性に捉われないものとするために、調査対象の１グループに２人以上の同意がある場合は、同意を得たものとした。また、「判断の基準」が示されていない意見については除外した。次に、この“逐語の要約”から、どのような視点を持って判断しているのかという内容について、研究者間で繰り返し検討し、類似するものを集約し合意が得られた段階で、内容を概念化し、それを『視点』とした。具体的な方法としては、例えば、“他の子と比べてうつむき加減で暗い表情をしている”“身体の動きが小刻みで細かく普通の生徒と違う”等の“逐語の要約”から、養護教諭が判断する基準、すなわち比較したり幾つかの事象の関係性を考えたりするための根拠となっている内容を「判断の基準」として着目しラインを引いた。上記の例では、“他の子と比べて”“普通の生徒と違う”等の部分にラインを引き、それらの言葉を分析の‘手がかり’とし、類似する内容を集約、概念化し『視点』とした。そして、その『視点』の定義については、“逐語の要約”を繰り返し確認しながら『視点』を説明できる内容を検討し決定した。

② 分析ステップ２:【着眼点】の抽出

分析ステップ１で抽出した“逐語の要約”を視点ごとに振り分けた。“逐語の要約”から、養護教諭が判断するときに具体的に着眼している症状、状態、状況、行動、情報等について抽出した。例えば“他の子と比べてうつむき加減で暗い表情をしている”“表情に動きがなく乏しくふつうとは明らかに違う”等の“逐語の要約”から“暗い表情”“表情に動きがなく乏しく”等、着眼している具体的な子どもの症状、状態、状況、行動、情報が示されている内容を抽出した。さらに、それらの類似するものを

集約し【着眼点】とした。上記の例では、“暗い表情”“表情に動きがなく”から【表情】という【着眼点】を抽出した。その後さらに、学校種別に各【着眼点】の有無を確認し、まとめた。

なお、データの真実性確保のため、判定基準となる明解性（研究プロセスの監査：外部チェック）、信用可能性（研究者の知見と研究参加者の認識との比較：研究参加者チェック）、移転可能性（一般化の可能性：研究対象者外の確認）、確認可能性（データの保管）の概念を用いた(Hollway,2001)。明解性については、データ解釈及び分類において、質的研究に何度か経験のある研究者５名（研究者２名、小、中、高等学校養護教諭各１名）によって、研究のプロセスの全段階において確認しながら分析を行った。移転可能性及び信用可能性については、質問紙調査・グループインタビュー及び個人インタビューによって確認した。

４．結果および考察

表　子どもに心の問題が存在する可能性があると判断するときの養護教諭の『視点』

アセスメント対象	情報収集場面	視点	学校種 学校種別『視点』あり＝○		
			小学校	中学校	高等学校
個	観察時に得られる情報	１　日常的に捉えている子ども達・一般的な子ども達の症状・状態・行動との表れの違い	○	○	○
		２　日常的に捉えている子ども達・一般的な子ども達の心身の発育・発達との表れの違い	○	○	ー
		３　日常的に捉えている子ども達・通常の人間の身体(生理学的)反応・状態との違い	○	○	ー
		４　通常、想定される発生原因・状況との違い	○	○	ー
		５　集団の中での周囲との関係性・反応に違和感	ー	○	ー
	経時的な観察から	６　頻繁に起こっている、または続いている同じ症状・状態・行動	○	○	○
		７ 保健室への決まった来室パターン	○	○	○
		８　以前との変化	ー	○	ー
	観察以外	９　対象とする子どもに関する外部情報	ー	○	ー
集団		10　特定の社会的集団に見られる状態・状況・行動傾向	○	ー	ー
		11　対象とする子どもの付き添いまたは、常時一緒にいる仲間集団の持つ性質の同質性	ー	ー	○

表に示したように、11 の視点が学校種別に明らかになった。見られた視点は○で示した。質問紙調査でこれらの視点は、50%、70%、で採択された。教諭の調査でも、同様の視点と異なる視点が明らかになった。これら視点と着眼点を学校種別診断指標とした。

「痛み（疼痛）の可能性のある状態」

開発途上の養護診断については、事例分析から抽出された養護診断名「痛み（疼痛）の

可能性のある状態」に対して、検討を行った。その結果、言葉や表情、態度など 18 の診断指標があげられた。この痛み（特に急性疼痛）の状態をあらわす養護診断名は NANDA の看護診断名にもあげられており、痛みという同じ状態を指すと考えられることから、その診断指標と比較した。その結果、言葉や表情など一致するものがある一方で、表出する行動には養護診断独自のものがあり、これは養護教諭が子どもをみる上で特徴と考えられる可能性があるものであった。また、痛みの存在を診断する上での診断指標の中には痛みの程度によってその有無に影響するものもあり、今後、診断指標を精選していく上で、痛みの重症度に関しての取り扱いについて検討していくとともに、自覚症状である痛みを、訴えによって受容しつつも、一方では客観的にとらえていくための診断指標を提案していく必要があると考えている。

養護診断全体の枠組みの検討

養護診断開発において，概念枠組みの確立は必須であり，養護の近接領域である看護における看護診断の概念枠組みが大いに参考となる。看護診断分類体系は，1974 年の時点では看護診断名をアルファベット順に並べられたのが最初であった。その後看護診断枠組みの必要性から 1992 年 NANDA 分類法Ⅰが開発され，2000 年分類法Ⅱという枠組みに改訂されるに至っている。養護診断の概念枠組みについては，遠藤（2009）が初めて看護診断の枠組みを参考に，領域番号・クラス番号・診断番号で列記するよう提案した。しかし，主に健康な子どもを対象とする養護診断では課題が残され、養護診断の概念枠組みの更なる改訂の必要性が考えられた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①鎌塚優子、岡田加奈子、子どもに心の問題があると判断するときの教諭の視点の抽出―小学校、中学校、高等学校別養護教諭の視点との相違―、日本健康相談活動学会、６、34-54、2011、査読有

②鎌塚優子、岡田加奈子、子どもに心の問題が存在する可能性があると判断するときの養護教諭の視点―フォーカス・グループインタビューによる小学校、中学校、高等学校の視点の抽出―、日本健康相談活動学会、５、40-65、2010、査読有

〔学会発表〕（計３件）

①Yuko KAMAZUKA、Kanako OKADA：Extraction of Viewpoints of Teachers and Yogo Teachers When the Possibility of Mental Problems is Identified in a Child、2nd East Asian International Conference on Teacher Education Research、2010 年 12 月 15 日、香港教育学院

②三村由香里：養護診断開発の課題と展望―養護診断開発の方法とプロセス―、日本学校保健学会第 57 回総会、2010 年 11 月 27 日、女子栄養大学

③三村由香里、竹鼻ゆかり：どのように見立てるか、どのように繋げるか、そして･･･、日本学校保健学会第 5 回学術集会、2009 年 2 月 28 日、千葉大学

６．研究組織

(1)研究代表者

岡田　加奈子（OKADA　KANAKO）
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：10224007

(2)研究分担者

三村　由香里（MIMURA　YUKARI）
岡山大学大学院・教育学部・准教授
研究者番号：10304289

葛西　敦子（KASAI　ATSUKO）
弘前大学・教育学部・准教授
研究者番号：80185735

(3)連携研究者

竹鼻　ゆかり（TAKEHANA　YUKARI）
東京学芸大学・芸術スポーツ科学系・准教授
研究者番号：30296545

松枝　睦美（MUTSUMI　MATUEDA）
岡山大学大学院・発達支援学系・准教授
研究者番号：30347653